

うおのぞき

感魚室

—幕の隙間—



入山夜鵜

うおのぞき
「感魚室」 制作中

青く暗い水族館を何日も、何周もするたびに、
たくさんの詩が生まれた。
それらは観察レポートのようにも、感傷のようにも、
空想のようにも思える。
目の前の水槽を自分の言葉で再構築したとき、
自分の言葉でできた水槽は、
果たして目の前の水槽と同じものになるのだろうか？
「感魚室」
これは、一人の人間の中に生じた波間の記録。

クリオネ

クリオネは逆さだ
胎児のように逆さだ
流水を失くして
やるせなく逆さだ
けれどもいま一匹
ほほをおさえて照れた
恋は苦しいか
それゆえか逆さだ

タコ

タコの顔は見えない

見えるのは大胆な太い足と

白くやわらかな吸盤と

申し訳程度についた

穴ともいうべき口ばかり

そんなにも曝して

目元ばかり隠して

赤黒い箱の春に

なぐさめもなく、タコ

イロカエルアンコウ

赤子のような手が

まちがえた ひれが

ウミブドウをきゅと掴む

海は母だと云うように

本誌に収録された詩の無断使用および無断転載を禁ずる。



ネットプリント「感魚室 一幕の隙間—」

発行者：入山夜鷗

X(旧 Twitter)：@812_iri

Mail：yaits_bngk @ outlook.jp

Portfolio：potofu.me/812iri →

